

國學院大學學術情報リポジトリ

岡本起泉『恨瀬戸恋神奈川』論：
明治初期草双紙における虚実の一例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-05-20 キーワード (Ja): 岡本起泉, 虚実, 草双紙, 明治初期文学, 有喜世新聞 キーワード (En): 作成者: 安西, 晋二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001626

岡本起泉『うらみのせどこひのかながハ恨瀬戸恋神奈川』論

— 明治初期草双紙における虚実の一例 —

安西晋二

I 新聞発の草双紙と岡本起泉

明治一〇年代の草双紙は、新聞連載に基づく作品が多かった。仮名垣魯文『高橋阿伝夜双譚』（金松堂、一八七九「明治一二・二・四」）に代表されるような毒婦物などは、現代でも知られるその好例であろう。明治一〇年前後は史実に取材した新聞発の戦記物も少なくない。^①そこには、当時の新聞というメディアと密接な、「事実」の報道が意識されていたと解されている。

たとえば興津要は、「三条の教憲」によって実学的志向を強めていく傾向を受け、明治初期の「小新聞が政治経済以外の三面記事的ニュースをたんに報道するという実用的役割に、戯作のうけもつていた娯楽性の提供という役割りをもくわえつつあった」とし、そのうえで「実学的風潮は、新聞という制約された場をはなれた単行本にもいぜんとして強く影響していた。したがって、十、十一年あたりの復興期の戯作は、必要以上に事実性を強調していた」と述べている。^②和田繁二郎は、「実録物」に見られた歴史的事実への関心は、明治十年前後より、当時の事件の当事者や、巷間無名の人物の数奇な運命の方へ移っ

て」いき、「それらは新聞の報道を原形とした（つづきもの）に本格的な出発を見せる」が、作品ごとの多寡はあれども脚色や粉飾は否めず、殊に岡本起泉『其名も高橋毒婦の小伝東京奇聞』（鳥鮮堂、一八七九・二一・三）や仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』などは「基本的な姿勢」としては、あくまでも事実在即して書くことをたてま^⑤えとして」いたという。

一方で山本和明は、「事実」を重視する傾向を、讒謗律（一八七五「明治八」年六月制定）等の法的規制を含む「ある種の制限」と捉え、「三条の教憲」などの出された明治五年当初が問題ではなく、むしろ近代法が制定され施行されていく明治十年代に、戯作者がどう対応していったかの方が実のところ問題」であり、「事件の速報性というか、事件そのものの行方まで報じることは、明治に至って新たに見いだされた趣向^⑥」と評価する。さらに山本は、「明治黎明期戯作は、虚構を取り交えつつ実事件を扱うなかで、それでも自由闊達に表現することが出来なかった。法の整備、法の網の浸透によって、徐々に、ある種の規制から影響を受けずにはいられなかった」と述べ、その帰結として「法の網を考えずともよい近世戯作の復刻^⑦」に重きを置いている。一八八二（明治一五）年に施行された刑法による新聞連載作品の筆禍（名誉毀損罪）事例を精査した松原

真は、「筆禍にともなう不利益が小説の商品価値を上まわるようになり、制作側は、登場人物のモデル関係者から刑法第三五八条抵触につながりかねない抗議を受けると、すぐに連載中絶を選択するようになる」とし、その影響の大きさから「新聞小説が虚構の度合いを高める方向に舵を切ることは容易に想像がつくであろう^⑧」と結ぶ。

明治一〇年代の新聞連載作品とその草双紙化をめぐる時代状況および法的規制はやはり軽視できないだろう。新聞報道に端を発する「事実」の強調（と「速報性」）は変わらず重要視されながらも、そこに潜むリスクをいかに回避するかという問題が同時に底流していたようだ。「実」に重きを置きつつ「虚」に傾いていく傾向は、（つづきもの）が増加する明治一〇年代に一層顕著になっていった。そういった事例のひとつとして、一八八二（明治一五）年に、鳥鮮堂網島亀吉より全二編六冊で刊行された、岡本起泉『恨瀬戸恋神奈川』（芳川春濤閣、歌川國松画 以下、『恋神奈川』）に着目したい。

岡本起泉は、『東京魁新聞』（のち『東京新聞』）の記者として活動し始め、草双紙の執筆にも着手した、ジャーナリスト兼戯作者である。「事実」を意識した紀泉の執筆態度に関してはすでに複数の指摘がある^⑨。事実確認が困難な題材や書き方に

よつては虚構性の高さを予感させられる場合も多い。とはいえ、「事実」に即した出来事の発信が、起泉の作品にも意図されていたことは確かであろう。⁽⁸⁾

『恋神奈川』は、岡本起泉の代表作である『夜嵐阿衣花廻仇夢』（金松堂、一八七八・六・一一）や『其名も高橋 毒婦の小伝東京奇聞』に比べれば短いものとなる。刊行月の記載はなく、起泉による初編上の序文には「明治十五年二月下旬」とある。同年四月中旬に起泉は肺を病み、休職し、同年七月二〇日には、二九歳という若さで急逝してしまう。起泉の死去については、伊東専三の追悼文に詳しい。⁽⁹⁾伊東によれば、起泉は、一八八〇（明治一三年一〇月二三日）に『有喜世新聞』の発行元である三益社に入社した。東京魁新聞社（『東京新聞』）が閉社し、三益社に移ってからも『有喜世新聞』で健筆を揮っていた起泉の死は、記者として作家として円熟味を増しつつあるときであった。その結果、未完の作品もいくつか残されることとなったが、『恋神奈川』は起泉が病に倒れる直前に完結させた作品となる。

『恋神奈川』は、友井由太郎という人物が実際に起こした殺人事件を描いている。『恋神奈川』に先立って、一八八二年二月一二日発行の『有喜世新聞』第一二二二号「新聞」欄に同様の記事が見られる。当該記事によれば、友井由太郎の凶行は二

月一〇日に発生している。わずか二日で記事にされたこの事件は、〈つづきもの〉ではない。二月一二日に一回限りで掲載された記事であり、かつ署名もないため起泉が執筆したかも定かではない。しかも、『有喜世新聞』第一二二二号の二日後に発行された、同紙第一二二三号（二月一四日）には、「○恨瀬戸恋神奈川^{三冊}／右ハ諸新聞にて評判なる本月十日の夜の神奈川駅人殺しの件を委しく綴りし美本にて近日出版 浅草瓦町 綱島亀吉」と早くも『恋神奈川』の広告が載せられているのである。

衝撃的な事件の概要を記事として報道したあと、「人殺しの件を委しく綴りし」という「事実」との連続性を謳う、より詳細な内容の草双紙へと速やかにつなげていく。現代でも同じような、ワイドショー的関心を煽る販売戦略だ。ただし、本稿で問題視する点は、事件報道という「実」の面に基づく草双紙が、「虚」の側面を加えられつつ、いかにしてひとつの物語となり得ているかにある。

Ⅱ 友井由太郎事件の報道記事

まずは「実」の面に相当する事件報道を確認しておきたい。少々長くなるが、『有喜世新聞』第一二二二号に掲載された、

友井由太郎の記事を全文引用する。

○どう考へても考へ切れぬ分別者といふべきハ東海道
神奈川郡神奈川町の酒渡世友井由太郎(二十)といふ男
で余り放蕩を尽すより親父も遂にハ捨置かね昨年中町の
親類田島半左衛門へ懲しめの為預け置と其本家なる同駅の
青木町なる酒問屋岩崎三平の長女お由(十九)も男騒ぎ
の紛紜から武州久良岐郡三分村岩崎某の次女お幸(二十)
といふ下女を附添に田島方へ当分預けの身分と成たを不図
由太郎が思ひ染め當つて見たら満更ならぬ容子と自惚れ去
る九日半左衛門も其女房お鉄も何処かへ行たを幸ひ直談
するとお由ハ有繋に無碍にも言れず曖昧返辞に由太郎ハメ
た積りで其夜更にお由の寢床へ忍んで行と物の見事に匆ら
れたので余義なく寥々帰つた翌朝お芳ハ主へ云々と宣告
たより由太郎ハ忽地奥へ呼付けられ叫れた但事済に成掛つ
たを下女お幸が口善悪なくも店の者へ言触したゆゑ由太郎
ハ斯く外聞を欠く上ハ飽迄遣て退んものと覺期を据て一
昨夜出刃庖丁を懷中し二時ごろ再度お芳の聞へ忍び至り
て談じるも常に変つた見想に声さへ自づと高けれバお鉄が
聞附何事と其場へ来りて夫と見るより由太郎を太く窘め

ても更に立去る容子なければエ強情なと横面をびつし
やり打バ最是迄と彼出刃庖丁で切掛りお鉄に四ヶ所も重
疵を負す其物音に驚いて駈付来る半左衛門を切殺した上
お由の胸板只一笑に即死させ下女お幸をも切倒して自分ハ
昨日の晩方に切腹なして三ヶ所まで咽喉を突たが死切ぬ間
に其筋へ引れたとハ何とマア⁽¹⁰⁾

加害者と被害者の名前、殺害にいたる動機などが示されてい
る。発端は、由太郎によるお由への夜這いが失敗したこと、そ
れを半左衛門に伝えられ、由太郎が叱責を受けたことにあるよ
うだ。下女のお幸がそのあらましを「口善悪なくも店の者へ言
触した」ことも、由太郎に凶行を決断させた原因としては大き
いだろう。このような犯行の経緯は、加害者自身の自白による
もののなか。「死切ぬ間に其筋へ引れた」とあり、取材段階で
は由太郎も存命であったかに読める。が、「三ヶ所まで咽喉を
突た」人間がどこまで話せたのかには疑問も残る。外面的な事
柄は、重傷を負わされたお鉄や「店の者」たちの証言によつて
いるのかもしれない。いずれにせよ、第三者の証言で成り立つ
と推測される、客観性を保持した情報は、この場合「事実」と
呼んで差し支えあるまい。

一方、記事に書き手自身の感慨が現れている点にも注目しておきたい。由太郎は「どう考へても考へ切れぬ無分別者」とされ、最後は「引れたとは何とマア」と呆れているかのような嘆息で終わる。事件報道として読者に情報（事実）を報道するだけでなく、書き手自身の個人的な見解を交え、加害者像が形成された記事になっている。こういったあり方は、『恋神奈川』の構成や内容とも無関係とはいいがたい。多くの〈つづきもの〉は、出来事の記述に留まらず、一人ひとりのセリフを加え、物語化しており、虚と実の境界が必然的に曖昧である。草双紙化された作品の構成・内容・文体もやはりその延長線上に位置付けられる。むしろ、草双紙になれば挿絵がすべてに入り、物語内容と一致（していたり、していなかったり）する場面の映像化までもが行われ、新聞記事よりも虚構性が高く感じられる状態となる。

「事実」の報道が企図されながらも虚構性が高いとは矛盾にも見える。だが、早くから興津要らに指摘されてきたように、これが〈つづきもの〉およびその草双紙の特徴でもあった。読者の関心を惹くような装いを含み込んだうえでの「事実」性といったほうが近い。『恋神奈川』は、わずかな分量の新聞記事を「委しく綴りし美本」である。その飛躍がいかにして創造さ

れているかは、明治初期の草双紙における虚実を検討するうえで看過しがたい観点となるはずだ。

Ⅲ 語られる背景および内面性

『恋神奈川』初編上一丁表には、岡本起泉による序文がある。『有喜世新聞』の記事では、事件を起こした友井由太郎について「どう考へても考へ切れぬ無分別者」とされていた。一方、序文では「友井由太郎の如きハ其愚夫中最も愚夫といふべくして又自惚の増長せしより斯る妄惨の騒動にも及びしならんが何にもせよ深く慎むべきハ此一事」と語られている。『有喜世新聞』の記事中にもお由の態度を見た由太郎が「満更ならぬ容子と自惚れ」たとの記述はあった。だが、『恋神奈川』では、「無分別者」とのことはなく、由太郎の「自惚の増長」こそが事件の原因とされ、「深く慎むべきハ此一事」との教訓性が示唆されているのである。起泉の序文が「自惚の増長」に読者の目を向けさせている点は、『有喜世新聞』との相違でもあろう。

そもそも、綱島亀吉が「人殺しの件を委しく綴りし」という『恋神奈川』は、『有喜世新聞』の記事に比べて分量がかなり増加している。記事中で「去る九日半左衛門も其女房お鉄も何

処かへ行た」際に「直談するとお由ハ有繋に無碍にも言れず曖昧返辭に由太郎ハメた積りで其夜更にお由の寢床へ忍ん」だというくだりは、『恋神奈川』では、初編下二丁裏三丁表から六丁裏七丁表、二編上二丁裏三丁表から四丁裏五丁表までに相当する。由太郎が殺人に及ぶ場面は、『恋神奈川』の最後となる二編下七丁裏八丁表から九丁裏までとなる。『有喜世新聞』の記事と『恋神奈川』とで一致する部分は、二編六冊の一冊分程度に過ぎない。この一冊分にしても、『有喜世新聞』の記事よりもはるかに増量している。『恋神奈川』全体の八割以上が『有喜世新聞』にはまったく記されていなかった事柄であるとするならば、その紙幅は何に費やされているのかが問題となろう。

『恋神奈川』初編上は、神奈川宿の青木町（現在の横浜市）にある温泉場でお由が、友井由太郎に声をかけられるところから始まる。由太郎がお由を口説こうとするのを、お由の下女のお幸らが阻止する場面となる。由太郎は、その試みに失敗し、気を晴らそうとして向かった貸座敷で芸妓に溺れ、金を使い込んだ結果、親類である田嶋半左衛門のところへと奉公に出されてしまう。

由太郎、お由、お幸の家業や出自は『有喜世新聞』の記事と同じである。だが、『有喜世新聞』の記事にはない、由太郎が

田嶋方へ奉公に出される経緯が詳述されている。この場面の真偽は、事実確認ができないため明らかにできない。ほかにも初編上では、お由に対する由太郎の口説き文句や、由太郎とお幸との口論といったセリフがいきいきと描かれている。へつづきものと同様に、「虚」と「実」が曖昧な叙述である。これらは、「事実」に基づく情報というよりも、物語化が企図された虚構的な言説というべきであろう。

『恋神奈川』において、由太郎、お由、お幸らは物語の登場人物であるかのように語られている。特に、起泉の序文にある「自惚の増長」に関わる記述は、それを読者に実感させるだろう。初編上でお由が「迷惑らしき其体」（初編上三ウ・四オ）を見せた際に、意に介さず由太郎は口説き続けた。また、「楮幣をペラ／＼撒布す大尽遊び」に興じる由太郎に芸妓らが「宜き客」と思ってもてなすと、由太郎は「己が眼鼻立の揃ッて色の生白く品なりしたる所から自惚切て夫故に前のやうなる事さへも仕出かす程の男」（初編上七ウ・八オ）と語られる。「前のやうなる事」はお由を口説いたことである。お由と芸妓らの意図を由太郎は勘違いしている。そうして明らかとなる由太郎の内面性を、語り手は「自惚切て」いるという。つまり、由太郎の「自惚」が証明される文脈は、他者の認識とのあいだに誤差

の生じた内面性が語られていくことで作られているのである。

由太郎と、他の登場人物との内面の差異は作中でくり返し語られ、彼の「自惚の増長」を鮮明にしていく。なかでも、お由の認識とのあいだの差異は、由太郎の「自惚」を異様なほどに強調している。たとえば、お由は、由太郎に口説かれた際に手渡された菓子を、「有繋に無碍にも断れず迷惑ながらも手に受て給もやらずにうぢぐする」というさまを見せる。これを出太郎は、「素より大家の愛娘世間を知らぬものなりと独り極め」にする。「素より大家の愛娘世間を知らぬものなり」は、発声されていない独言的な心内語に類する言説であり、「独り極め」という由太郎の独善的な判断である。初編上八丁裏九丁表でお由は、「不身持の廉あるよし」にて岩崎の分家である田嶋家に預けられたとされる。「不身持の廉」とは、岩崎の店に出入りをしていた「鳶の者で近頃魚屋と商売かへした勇吉といふ人」（二編上七ウ・八オ）とお由との噂であったことがのちに語られてはいる。詳細が記されない不確かな事柄ではあるが、初編中でお由は、想う相手との関係が成就できない現状を憐み、田嶋家の井戸に身投げをしようとまでするのである。由太郎と半左衛門に説得され、お由は身投げを思い止まった。しかし、「鳶の者」に思い焦がれ、投身を計るお由は、由太郎が「独り極め」

するような「世間を知らぬもの」とはいいがたいだろう。

明らかになっていくお由の内面性と食い違った由太郎の認識は、身投げ騒動後には、「斯て由太郎ハお由が此身投の沙汰さへ我身をバ思ひ迫たる娘氣にもどかしがりて為たのでハ有まいか杯自惚の困じるにつけ彼夜しも半左衛門が今暫し来ずに居たなら我望しも叶ふが上に彼女もまたさこそ満足なるべき」（初編下二ウ・三オ）と語られる。「身投の沙汰さへ我身をバ思ひ迫たる」と由太郎が「自惚」る理由は文脈上にはない。お由の想いを知らず、確たる根拠がないまま、「無粋な恋知ず忌々しいハ半左衛門」とまで続けられていく由太郎の心の内は、「自惚」どころか逆恨みも甚だしい。極めて独善的な由太郎の内面性が表されていよう。

由太郎とお由の内面は、『有喜世新聞』の記事にもあった半左衛門とお鉄が留守にする場面でも仔細に語られる。部屋で草双紙を読んでいたお由は、由太郎が入ってくると、「有ずもがな」といふ胸の想ひハ自づと色に出て余所くし氣に会釈ふ（初編下四ウ・五オ）。「有ずもがな」という思いを「尚も悟らぬ」由太郎に、お由は「大儀なれど彼ハ並々の奉公人とも違ふがうへに言て見れば此身が命の親ぞとも思ふがゆゑに爰でいま無碍に恥をバか、せんハ氣の毒なりと斟酌し一時ハ其座ハ戯れ言に

紛らしゐたる」(初編下六ウ・七オ)のである。この場面でも、由太郎の口説き文句はお由にまったく響いていない。むしろ、お由は「無碍に恥をバカ、せんハ氣の毒なり」と氣を遣つていくくらいである。両者のあいだで表面化せず、読者にのみ明かされていくお由の内面は、由太郎の「自惚」がいかにかの外れであるかを際立たせていよう。

お幸が帰つてきたためお由の部屋を後にした由太郎は、「およびしが判然断らざりしを全く厭でない事と独りで勝手に定めしより本望達する時来りぬ」(初編下九ウ)と考え、その日の夜にはお由の部屋へ夜這いに向う。決定的に食い違ふ両者の内面が語られるからこそ、独善的な由太郎の姿がますます前景化してくるのである。

二編上は、由太郎の夜這い場面から始まる。「全く厭でない」と確信している由太郎は、お由が拒絶するとは想像もしていない。対するお由は、悪びれもせず部屋に入ってきた由太郎の無礼な振る舞いに堪えかね、次のように叱責するのである。

由さん大抵にしてお置なさい人を馬鹿にするもほどがある此方ハ何しろ続き合ひの家の息子と思へバこそ昼間も勝手なことをいつて人を散々困らせたのさへ胸をさすつて程よく会釈

ひ開流しにも仕たのをバ宜事にして此不体裁夫でハ年端も行ぬ私とお侮りとしか思はれません殊にハ斯して爰の家に居るといふのもお互ひに不埒が有て預けられた其身分でも有ながら若しも猥らな事が有てハ／第一此所お爺さんに済ぬハ素より知れた事私妾とても一旦の心得違ひを今更に悔んで日外身を投て死なふと仕たのも実ハ其為サア夫程の折から故些とも早く戻つて下さい又も貴君とよしもない浮名が立てハ是迄の私が究屈な思ひして慎んで居たのも水の泡イザ疾々

(二編上三ウ・四オ／四ウ・五オ)

引用部は、他者には伝わらない独言的な内面の叙述ではなく、はつきりと由太郎に伝えられた、お由の発話となる。お由は、相手の立場を考慮し氣を遣えんと同時に、限度を超えれば明確に意志を伝える人物でもある。由太郎は、この発言を受け、さすがに「述る所も理の当然争ひ難く見えしよりはハ一番失損また出直さずバなるまいか」と考え、「身の誤過を打託て改心したる体に見せ」(二編上四ウ・五オ)て、お由の部屋から出ていく。お由のことは、由太郎にとつても「理の当然」と判断されるように道理に適っていた。しかし、由太郎は「改心したる体に見せ」ているだけであり、本心では「改心」していない。

しかも由太郎は、「只此上のお願ひハ何卒是をバ内分に」(二編上四ウ・五オ)とお由に頼み、翌日には「知る者更にあらざりしかバ聊か心を安んじて何くハぬ顔に例もの如く店の用をバ足し居たる」(二編上五ウ・六オ)。由太郎にとって、反省のない表面的な謝罪をしてでも守るべきは、世間体を保つことであつたのである。

その後も、由太郎はいいかかわらず「お由をバ我手に入れるハどうしたもの」(二編上五ウ・六オ)と思案を続けている。由太郎は、自らの思惑が失敗しようと、挫けもしなければ反省もしない。自らの認識をあらためもしない(できない)。「恋神奈川」では、これが「自惚の増長」とされた由太郎の内面性となつてゐるのである。『有喜世新聞』第二二二号の記事にある「無分別者」の一言では説明が不十分でもあつた、加害者および加害行為の背景ともいえよう。

『恋神奈川』の初編上から二編中は『有喜世新聞』の記事にはない、殺人事件の背景が大幅に増補されているといつてもよいだろう。由太郎やお由の対話・内面(人物像)が描かれていたように、それは物語化(虚構化)された部分を多分に含んだ叙述である。虚実の境界が曖昧な状態であるが、だからこそ、「自惚の増長」という由太郎の性質はより鮮やかに読み取れる

ようになったはずである。同じく、『恋神奈川』ではお由の人物像もイメージしやすくなつていよう。『恋神奈川』は、出来事の記述から広がり、人物の内面をも描いている。人物像を詳細に語るさまは、(つづきもの)や新聞発の草双紙がもつ魅力のひとつではあろう。『恋神奈川』では、語られる内面性によつて浮き彫りにされていく由太郎の人物像に、かなりの紙幅が割かれてゐるのである。

ここまで由太郎とお由を中心に見てきたが、もうひとりの主要人物であるお幸についても触れておきたい。『恋神奈川』においてお幸は、しばしば由太郎の行為を阻む存在として登場する。初編上では、由太郎に声をかけられ困惑するお由をお幸が助けようとする場面がある。そこで「お前なんぞハ失敬ながら出る幕じやアないから黙ッてお在」(初編上四ウ・五オ)と由太郎にいわれたお幸は、「仮令斯して下婢奉公を修行の為と致すもの、私婢とても久良岐郡三分村で八人にも知られた岩崎喜右衛門の次女です事に寄たら此佝にハ済されませぬ」(初編上五ウ・六オ)といい返している。自己紹介を兼ねるような戯作らしい言説でもある。だが、男女の格差も激しい明治初期において「此佝にハ済されませぬ」とまで啖呵を切るお幸の姿は、「肩肘張るハ肯ぬ気性と見えたる」と語られる。由太郎とのあ

いだに交わされ口論は、お幸の勝気な性格をも表しているよう。初編下ではお幸が外出した際に、由太郎がお由の部屋を訪れていた。この場面の後、お幸は帰って来た際に外での出来事をお由に話す。その内容が、人力車の車夫との諍いである。人力車への乗車の誘いをお幸が断ったことで始まる口論は、初編下七丁裏八丁表から八丁裏九丁表まで続く。お幸は荒っぽい男性相手であっても「例もの癖でだまつて居られず一言ふた言やり返し」(初編下八ウ・九オ)てしまう。こういった性格もあって、お幸は由太郎にお由との関係を阻む障害として目の敵にされていくのである。

二編下でお幸は、由太郎が再びお由の夜這いに失敗したことを田嶋の家の「下婢達」たちに話してしまう。これが噂となつて広まり、半左衛門とお鉄の耳にも入ってしまうのである。この状況を見たお由は、「痛くなき腹探らる、も心苦し寧そ我から話した上無事の計ひ頼まんと思案を定め」(二編下三ウ・四オ)、由太郎の夜這いについてお鉄に告げることとなる。『有喜世新聞』の記事よりも経緯が詳細になっているわけだが、事態を動かすきっかけを作ったのがお幸である。そして、由太郎は半左衛門に呼び出され厳しく咎められる。すると、「店先で八雇人等が早くも知てか此方を見てハ眼引袖引笑ふ体」であり、

「一室の事を誰かハ既に伝へしと心を附れば是もお幸がお曉古よりして一同が斯く逸早くも知つたるなれバ憎さも憎し」(二編下六ウ・七オ)と語られていく。お幸から広まったこの一件は、「忽地に近所や出入の人々ハ知らざる者ハなき程の容子に外へハ儲置て店へも出てハ居堪まれぬ苦しき詮義」(二編下六ウ・七オ)とされ、由太郎の居場所を奪うかのように、彼を追いつめてもいるのである。

『恋神奈川』は、『有喜世新聞』の記事の情報を「委しく綴りし」というだけではなく、主に由太郎とお由、さらにはお幸の人物像を詳細に語り出している。よって、由太郎の「自惚の増長」をはじめとした各人物の内面や言動の活写と、殺人事件にいたる背景の補完とが、『恋神奈川』を構成する主軸であるといえるだろう。この書かれ方を見るに、新聞記事における「事実」は前提となっている。それをふまえつつ、『恋神奈川』は初編上から虚構性に彩られた物語へと飛躍しているのである。

IV 滑稽化される内容と文体

虚構性という点においては、内容・構成とともに、表現や文体も取り上げておくべきであろう。『恋神奈川』では、戯作な

らではの書き方で、「事実」性よりも明らかに虚構性を高めている言説が、大きく分けて二箇所で見られている。ひとつ目は、半左衛門・お鉄・お幸の留守中に由太郎がお由の部屋に入つた場面である。

自室でお由は草双紙を読んでいた。

およしハ所在なきま、二階へ行て我部屋から持出し来る草双紙ハ矢張綱島で出版せしお伝の奇聞嶋田一郎梅雨日記を始めとし澤村田之助曙草紙幻しお竹に至る迄種々取揃へしものなるが夫をバ其所へ意久地もなく据つて順に見て行くうち何やら感ずる処ありけん
(初編下三ウ・四オ)

「矢張綱島」の「綱島」とは、『恋神奈川』の版元である島鮮堂綱島亀吉を指す。続く書名もすべて島鮮堂の本であり、かつ岡本起泉が執筆した草双紙である。「矢張」とあるように、読まれるのが当然ともいふべき書かれ方がされている。身投げ騒動を起こしたあと、部屋に籠つたお由が所在なげにしているさまを語りつつ、島鮮堂および起泉の出版物を宣伝していくかのような言説になっているのである。

実際のお由も島鮮堂の草双紙を読んでいたのかもしれない。

不明である以上、否定はできないが、やはり不自然な叙述というほかない。当時の読者に対するユーモアの類いと解すべきであろう。当然ながら、「事実」からは遠く離れた虚構性が喚起される。しかも、部屋に入った由太郎は、『澤村田之助曙草紙』(五編一五冊、島鮮堂、一八八〇・七一〇)を取り上げて内容を批判し、お由の口説き文句につなげていくのである。

『澤村田之助曙草紙』は三代目の田之助を描いたものとなる。三代目の田之助は、舞台上での事故により脱疽を患い、指や足を切断することになるも芝居に出演し続けた悲劇の役者として知られている。田之助は、病の悪化のため、一八七八(明治一一)年七月七日に死去した。起泉の『澤村田之助曙草紙』は田之助の死から二年後に刊行された、彼の伝記的な草双紙となる。『恋神奈川』作中において由太郎は、「何だ田之助の本か私ハ一体こんなものハ好ないゆゑに中ハ何様だか竟に読でも見ません」(初編下四ウ・五オ)としながらも、「彼俳優ハ上野の坊主と柳ばしの芸者を迷ハした報ひで」(初編下四ウ・五オ)、「彼様業病にもなつたと申す事です」(初編下五ウ・六オ)と話している。続けて由太郎は、「迷ハせその俚知らぬ面するハ一番罪だといひますから貴嬢なんぞハ其罪を作らぬやうに用心なさい」「その美しいお顔にハマよつて居るのが随分沢山既に爰

にも「(初編下五ウ・六オ)とお由を口説く。『澤村田之助曙草紙』から口説き文句へと自然に接続された叙述にも見える。だが、『澤村田之助曙草紙』ほか、起泉作品の列挙は『恋神奈川』の内容とはほとんど無関係な情報である。やはり虚構的といわざるをえず、読者に滑稽味を強く感じさせるような言説であろう。

もうひとつ、同様の傾向をもった書き方がなされた箇所がある。二編上でお由に拒絶されたあと、由太郎は、過去に「浮名さへ立た中」(二編上七ウ・八オ)であるお麻と横浜で偶然再会する。すでにお麻は魚屋の勇吉(お由の想い人)と結婚していた。しかし、勇吉との生活に不満を抱くお麻と、お由に対する思いを遂げられない由太郎とは、「再び怪敷夢を結び初めて」(二編上九ウ)しまう。この不倫関係は、二編中でお麻の夫である勇吉に発覚する。

浮気の現場に踏み込んだ勇吉は、逃げようとするふたりを捕まえて脱ぎ捨てられていた帯で両者を柱に縛り付け、仕事道具の出刃庖丁を閃かせながら怒声を浴びせる。刃傷沙汰になりかけている緊迫した場面の発話において、勇吉の仕事が魚屋であるがゆえに、どこどころに魚名を当てはめた文章表現が用いられているのである。たとえば、「此節鰯の鳴々へ虫が着たと鰯鰯で噂も屢々芝海老のおぼろ気ならず聞たより何時ぞハ曇ら

ぬ鏡鯛の鏡にうけて一詮議と思へど鯰の是ぞといふ」(二編中四ウ・五オ)という勇吉の発話では、「鰯の鳴々」は「うちの鳴々」、「鰯鰯」は「方々で」の駄洒落となっている。「屢々芝海老の」は「屢々」から「しば」の音を連続させたもの、「鏡鯛」は「曇らぬ」の縁語となる「鏡」を名にもつ魚名、「鯰」は「なまじ」の駄洒落であろう。

これらは発話である以上、肉声である。文字化によって鮮明になる魚屋に絡めた駄洒落という意味は、音としての肉声ではかなり不明瞭になるはずだ。妻の浮気現場に踏み込んだ夫の怒りから発せられたことばのなかに、「芝海老」や「鏡鯛」などとするのも不自然ですらある。刃傷沙汰に発展しかける場面であるにもかかわらず、その雰囲気横滑りさせ、緊迫感を欠いてしまうかのような文体が形成されている。勇吉の生業以外に必然性のない表現の使用は、興津要の述べた「戯作のうけもつていた娯楽性の提供」でしかあるまい。いわばそれは、内容における緊張を表現における弛緩で滑稽化していく文体である。このような勇吉のセリフは、二編中四丁裏五丁表から六丁裏七丁表まで続く。そのなかで、ほかにも「烏賊鰯」や「太刀の魚」「白魚」「生蛸」「アカエの針」「飛の魚」「比平魚や鰯」「鯰鰯の吊し切か鯉の活作り」と、魚屋に縁のあることばが次々と

現れる。巧みな罵声ともいえるが、やはり滑稽でもある。

浮気騒動は二編中の終わりまで続き、勇吉の家の隣人に仲裁され、由太郎は「密夫の勘弁金と言ってハ外聞も宜くない」といつて勇吉から出刃庖丁を「五十円に買取る事」（二編中八ウ・九オ）となる。しかし、由太郎は「雇人同様夫でハ値段が高過ると押引の末三十円で手打と成た」（二編中八ウ・九オ）。あいかわらず「外聞」を気にしながらも、「勘弁金」を値切る由太郎は滑稽ですらある。ただし、ここで由太郎が手に入れた出刃庖丁は犯行の凶器となる。二編中までで殺人にいたる背景と凶器という伏線が整えられた。滑稽化されながら語られた物語は、凶器の入手につながれたあと、出刃庖丁による惨殺という展開へと一気に突き進んでいく。「事実」の報道性にそぐわない、滑稽味にあふれた内容や文体は、弛緩から緊張へといたるコントラストを作り、『恋神奈川』の凄惨な結末をより印象付けるともいえるだろう。

V 殺害にいたる心理を語ること

殺人事件の背景と凶器が語られ、残るは直接的な動機である。二編中八丁裏九丁表には、「悪事八千里の喩へ前の密夫一件を

誰とハなしに告る者のありし」とあり、お麻と由太郎の騒動は、田嶋の店の雇人たちにも知られるところとなっている。由太郎の醜聞はお幸が話したことによってお由の耳に入り、「忘れもやらぬ情夫」（二編中九ウ）である勇吉の住所などをお由が求めるようになる。お由は勇吉の情報を知らうとするあまり、夜這いの一件以降、避けていた由太郎に「此方から言葉をかけるやうにも」（二編下一オ）なっていく。

由太郎の醜聞は、勇吉に対するお由の想いを前景化し、彼女が再び由太郎に話しかけるようになるきっかけとなっている。由太郎は、「お麻に心を移してゐた間ハお由が事ハ弗然と忘れて」（二編下一オ）いた。ところが、顔を合わせるたびに「珍や宝や言れていと尚増る想ひに又しても持たが病の自惚」（二編下一ウ・二オ）となり、お由の部屋に入り込んで彼女をまたも口説こうとする。

お由の本心が伝えられないがゆえに、「珍や宝や言れ」た由太郎は「自惚」を起こしてしまう。この勘違いは、勇吉への想い秘めたお由の言動が、かえって由太郎を刺激してしまった結果でもあるが、「病の自惚」という由太郎個人の内面性として語られている。第Ⅲ節で確認した、認識の差異が「自惚の増長」を作り出していく展開に回収されているといってもよい。由太

郎の醜聞が広まった一件は、こうして認識の食い違いによる「自惚の増長」を再び生み出してしまふのである。

さらに、由太郎がお由を口説き、断られた顛末は、お幸によって他の雇人たちに暴露される。お由はそれを聞き、「痛くなき腹探らるゝも心苦し寧そ我から話した上無事の計ひ頼まんと思案を定めて」、お鉄に事情を話し、そこから呼び出された由太郎が半左衛門に厳しく叱責される場面へといたるのである。お麻との醜聞のみならず、半左衛門に怒られたことも、雇人どころか、店に入りの人々にまで知られてしまふ。この話が広まるきっかけを作った張本人もお幸である。

二編下六丁裏七丁表から七丁裏八丁表にかけて、そのときの由太郎の内面は次のように語られている。

つゞき 主人が親切を却つて愚痴にも恨みつゝ、出る店先でハ雇人等が早くも知てか此方を見てハ眼引袖引笑ふ体にも奥まりし一室の事を誰かハ既に伝へしと心を附れバ是もお幸がお曉舌よりして一同が斯く逸早くも知つたるなれバ憎さも憎しと齒がミをさせど何と咎むる便がもなき故胸を擦つてゐる内に口善悪なきハ下人の常夫から夫へと言伝へ語り伝へて忽地に近所や出入の人々ハ知らざる者ハなき程

の容子に外へハ偕置て店へも出てハ居堪まれぬ苦しき詮義に店蔵の二階へ上つて茫然と手を組居たるその内に不計日外の出刃庖丁が葛籠の底に入ありしを思ひ出して取出し寧そ直ちに死なんとも迫つて見たが待て暫し何様せ命を捨るなら尚も一応お由を口説き素直に承知をせぬ時ハ威して成とも本望を遂げ次へ

つゞき 笑ツた奴等の其面を見回し呉んよし夫も叶ハぬ事で有たなら不便ながらも当人始め忌々しいと覗つた奴等を何でも片ぱし切殺し而して置て我死ぬかの二箇に一箇と定めんと浅香の沼の浅間敷も胸を定めて深からぬ恨みの寝刃を其宵の間に合せて更るを待居たるハ即ち明治十五年二月十日の夜の事にて「以下略」

六丁裏七丁表の叙述には、お幸への憎しみと、周囲の目やことばに対する居たたまれなさが表出している。次に、出刃庖丁を取り出してから、「よし夫も叶ハぬ事で有たなら不便ながらも当人始め忌々しいと覗つた奴等を何でも片ぱし切殺し而して置て我死ぬかの二箇に一箇」と覚悟を決めていく。お幸への憎しみ、周りに噂され居たたまれない苦しさが高じ、自分を笑つた

忌々しい者たちへと広げられていく殺意が独白体で語られている。近世戯的な文体ではあるが、心理の動きが丁寧に捉えられている。

「即ち明治十五年二月十日の夜の事にて早丑満も過る頃家内の寢息を伺ひて又々およしが臥室へと忍び至りて挑みしかバ、由太郎はお由に「手強く恥しめ断」(二編下七ウ・八オ)られる。由太郎は、起きてきたお幸を「エ、いらざる邪魔だて引込で居ろと怒に任せて突飛」(二編下七ウ・八オ)す。騒ぎに目を覺ましたお鉄が窘め、「頬を平手でびつしやりと打バ焦立由太郎もう是までだと言も敢ず懷中なしたる出刃庖丁」(二編下八ウ・九オ)を取り出して、凶行に及ぶ。お由に「恥しめ」られ、お幸に「邪魔」をされ、お鉄に「頬を平手でびつしやりと打」たれる。現代よりもはるかに男尊女卑の甚だしい明治の世において、三人の女性の行為は、由太郎の自尊心を打ち砕くものであっただろう。容姿に自信のある由太郎にとって、顔への平手打ちはとどめである。その思いは、「もう是までだ」の一言に集約されている。

由太郎は、まず目の前のお鉄に重傷を負わせ、次いで駆け付けてきた半左衛門を胸への一突きで殺害し、「およしを捕へて口惜氣に血走る眼で睨みつ、今斯成て見る時ハ可愛さ余ツて憎

さが百倍何と言ぬが思ひしれと言も終らず無慘にも胸元深く刺通」(二編下八ウ・九オ)す。「口惜氣」な感情が目には、「憎さ」がことばに表される。問題はお幸である。「お幸が逃んと這出す影を認め飛掛り汝を逃して成ものかと言つ、何所と嫌ひなく減多やたらに切付て倒れたるをバ仕止し」とされているのである。「汝を逃して成ものか」との発言、お由が「胸元深く」への一刺しであつたのに対し「何所と嫌ひなく減多やたらに切付て」という苛烈な暴力性、この二点から、由太郎の憎悪がお幸にもっとも強く向けられていたと考えられよう。

由太郎は、自らの容姿に自信をもち、ブライドの高い人物である。醜聞を流され、失敗と叱責を暴露され、自分よりも立場の低い雇人(「下人」)に笑われ、何も思い通りにならないまま、由太郎は三人の女性に否定される。犯行の直接的な動機は失恋ではない。由太郎が殺害に及ぶ理由は、周囲の人々と状況によって自尊心が痛く傷つけられたためであろう。二編下六丁裏七丁表以降、結末まで語られている由太郎の心理がそれを物語っている。気ままに「自惚」ていられるような場所が、奪われていく。逼迫していく周囲の状況に、由太郎は追い詰められているのである。

由太郎の最後は、『有喜世新聞』の記事と同一である。そこ

に「聞がまに／＼斯ハ記しぬ」と、これまでの内容が伝聞である旨が添えられ、『恋神奈川』は閉じられる。伝聞とは他者の実体験の報告であり、すなわち「事実」の報道性を示す文脈形成である。だが、『恋神奈川』が新聞記事と異なり「人殺しの件を委しく綴りし」ところは、事件にいたる背景および由太郎を中心とするお由、お幸の内面性であった。死者が何に悩み、苦しんだか、何を殺害の動機としたかなど、「聞」けはしない。

岡本起泉は序文で、友井由太郎を「自惚の増長」という人物として規定した。しかし、語り出された由太郎の人物像は、明らかに「自惚の増長」を超えていよう。お由もお幸も、新聞記事の情報だけでは想像しがたい内面性が語られていた。『恋神奈川』では、殺人事件の発生に直結する由太郎、お由、お幸の心理が物語の登場人物であるかのように描き出されている。つまり、新聞報道という「事実」を前提とした、¹個々の内面性を語る物語となっているのである。彼らは、近世戯作的な類型的人物像とは一線を画す。語られる人物の内面性は事実確認ができないものの、そういった心理の描出は、読者に対して登場人物の実在性をより身近に実感させるリアリティに接近しているよう。わずかな「事実」に基づき虚構性の高い叙述を展開させた『恋神奈川』は、過渡期の草双紙で描かれた虚実の一例とし

ては、近代小説に一步近づいているといえるかもしれない。

現代でも、殺人事件が起きた理由、加害者心理や動機を多くの人々は知ろうとする。「人殺しの件を委しく綴りし」とされた『恋神奈川』も同じ発想であろう。そして現代でも、自尊心を折られ、屈辱を味わい、自らの生きる場所を奪われた結果、凶行に及ぶ加害者を誰もがたがび目にしてきたはずだ。明治の頃から現代になっても変わらない加害行為が発生する原因のひとつである。『恋神奈川』には、犯罪にいたる人間の、普遍的な心理的一幕が読み取れよう。

注

- (1) 佐々木亨「西南戦争と草双紙——『鳥追阿松海上新話』の出現をめぐる——」(『近世文藝』第六九号、一九九・二)、および『鹿兒島実記一夕話』と『鳥追阿松海上新話』—大倉孫兵衛の戦略—(『国文学研究』第一二七号、一九九・三)では、明治一〇年三月から翌一一年一月までの、西南戦争を題材にした草双紙と読本風の作品の増加が指摘されている。また、毒婦物の嚆矢となる 久保田彦作『鳥追阿松海上新話』(錦栄堂、一八七八・二、三)の刊行や人気の背景にそれが関連しているということが論じられており、示唆に富む。
- (2) 興津要「明治初年の戯作界—つづき物の発生—」(『転換期の文学—江戸から明治へ—』早稲田大学出版部、一九六〇・一)
- (3) 和田繁二郎「変革期文学の展開」(『近代文学創成期の研究—リアリス

- ムの生成」桜楓社、一九七三・一一）
- (4) 山本和明「結末の行方―黎明期明治戯作の位相」(『近世戯作の(近代)継承と断絶の出版文化史』勉誠出版、二〇一九・二)
- (5) (4) に同じ。
- (6) 松原真「中絶する新聞小説―明治十五年刑法と小説」(『言語文化』二〇二二・一一)
- (7) 平田由美「物語の女・女の物語(脇田晴子/S・B・ハンレー編『ジェンダーの日本史 下―主体と表現 仕事と生活』東京大学出版会、一九九五・二)では、岡本起泉『^{『源氏物語』の伝説}東京奇聞』について実際の「口供」に基づいていることが指摘されている。中村正明「『源氏物語』の伝説」(『源氏物語』の伝説)東京奇聞」(『国学院大学岡本起泉研究会編『明治初期文学資料集 岡本起泉 一』二〇二二・三)でも、高橋お伝の事件を「仮名説新聞」明治十二年二月一日から二日にかけて、わずか二回連載しただけで記事を打ち切り、その続きは合巻によって綴ることにした」という仮名垣魯文に対し、「起泉の方は新聞連載を並行しながらの合巻刊行であって、その点では愚直なまでの報道性を見せていると言っても過言ではなからう」と述べられている。拙稿「岡本起泉の描いた『毒婦』―お傳・お竹の形象」(『明治初期文学資料集 岡本起泉 一』)では、『^{『源氏物語』の伝説}東京奇聞』七編上にある芳川春壽の「序」の一節(「只其紀事の淡白にして興の薄きハ勉て其実蹟を綴り毫も架空の説を雑へざる我新聞記者の本色にして彼戯作者流が事実に関せず無稽妄誕奇説珍事を附会せし草紙物語と異なる所あれバなり」)を挙げ、全面的な信用はできないものの「事実」性を重視する起泉の傾向を示した。
- (8) 岡本起泉『白葛阿繁顛末』全三編九冊(芳川春壽関、歌川國松画、島鮮堂、一八八〇・二)の二編上二丁表の序文で起泉は、「古八冊子を綴るに虚を吐ねバ売れず今は実を記さねバ見る人なし古今看客の変更する斯の如シア、メン堂な世の中となつて」と、皮肉めいたことばで「実」

への意識を表している。なお、『白葛阿繁顛末』の引用は、『明治初期文学資料集 岡本起泉 二』(『国学院大学仮名垣魯文研究会編、二〇二五・三』)による。なお、引用に際しルビは省略した。

- (9) 『有喜世新聞』第一三五七号(一八八二年七月二二日)の「うきよはなし」欄に、伊東専三「岡本の病死を悲む」という追悼文が掲載された。なお、伊東の追悼文は、国学院大学岡本起泉研究会編『明治初期文学資料集 岡本起泉 一』所収の中村正明「岡本起泉について」にて全文紹介されている。

- (10) 『有喜世新聞』第一二二二号の記事は、東京大学大学院法学政治学研究科付属近代日本法政史料センター「明治新聞雑誌文庫所蔵の資料を使用し、翻刻は引用者自身による。なお、論文中における二度目以降の引用ではルビを省略した。

- (11) 和田繁二郎「明治十年代の戯作界」(前掲『近代文学創成期の研究―リアリズムの生成』)に同じ)では、「失恋による刃傷事件をあつかった『恨瀬戸恋神奈川』」と紹介されている。

*本稿における『恨瀬戸恋神奈川』翻刻本文の引用は、すべて『明治初期文学資料集 岡本起泉 二』(『国学院大学仮名垣魯文研究会編、二〇二五・三』)による。なお、引用に際しルビは省略した。